

裏方の 熱き魂 15

表舞台に立つことはないが、彼らのテニスに対する熱い思いがテニス界を支えている。これは普段は目立たない裏方さんたちのお話である。

取材・文＝井山夏生
インタビュー写真＝石直安子（本誌写真部）

「こんなプロジェクトを立ち上げました」というプレスリリースが届いたのは2005年のこと。それはマナーとテニスを融合させた草の根の普及活動「挨拶や礼儀作法を重視しながら、子どもたちにテニスを教えていく」という、正直なところ「何とも前時代的な……」と思わざるを得なかった。

しかし、プロジェクトはぐんぐん前に進む。本格的な活動開始から5年。このマナーキッズテニスの開催数は400回を超え、参加した子どもは3万人超。その先頭に立つて旗を振っているのが田中日出男さん。今回は、やむにやまれぬ思いからこのプロジェクトを立ち上げたという田中理事長の物語だ。

あれ？何かがおかしいぞ！

1996年、三菱化学の人事・労務を担当していた田中さんは、従業員同士が挨拶しなくなったことに問題意識を持って、いた。挨拶運動と称して「明るい挨拶をしましょう」「いきいき挨拶しましょう」と幼稚園でやっていたようなことを会社でやる必要があった。

釈然としない思いを抱いていた時

に偶然目撃したのが小学校の登校風景。先生が校門に立って「おはよう」と挨拶しているのに、子どもたちは知らんぷり。

「これは何か大変なことが起こっている」。それが田中さんがこのプロジェクトを立ち上げたきっかけとなっている。

テニス大好き人間だった田中さんは、早稲田大学庭球部OBに働きかけて、夏休みと冬休みにボランティアで小学生テニス教室を開催していた。ただテニスを教えるだけでは面白くない。そこで白羽の矢を当てたのが三菱グループ内で知り合った前田利祐氏。前田氏は加賀前田家の18代当主。立ち居振る舞いがさすがで、一緒にいるだけで背筋が伸びる。その姿が頭にあって田中さんは「子どもたちに礼儀作法や挨拶の仕方を見せてもらえないか」とお願いしたのだ。

実際に何度か教えてもらうと子どもたちにも変化が現れる。その様子に感激した現役女子部員が、このテニス教室をテーマに卒論を書いた。「マナーとテニスによって子どもたちが劇的に変わった」といった主旨。この卒論を目にした田中さんはいきなり強くした。「たしかにテニスで子ども

もたちを変えられるかもしれない。今は何かがおかしい。しかも早くスタートしなければ手遅れになってしまう」。この思いが第2のライフワークとなっていく。

2003年にリタイアした時、日本テニス協会の本井満ベテラン部長から「ベテランテニスを手伝ってくださいよ」と声をかけられて副部長に就任。しかし、ベテラン部門

部長に就任。しかし、ベテラン部門

Profile

（たなかりで）1940年（昭和15年）兵庫県出身。甲陽学院高校、早稲田大学を通じてテニス部に所属。三菱化学株式会社常務取締役東京支社長、江本工業株式会社取締役社長を経て、リタイア後の2005年に日本テニス協会幼稚園・小学校マナーキッズテニスプロジェクトディレクター。2007年よりNPO法人マナーキッズプロジェクト理事長に就任し現在に至る。

認定NPO法人マナーキッズプロジェクト理事長

田中日出男氏



だけで田中さんが取まるはずがない。なぜなら頭の中には「子どもを何とかしなければ」との思いが強くあったからだ。提言に次ぐ提言、最後は協会側が根負けして「それじゃ実験的にやってみましょう」ということになり、プロジェクトがスタートした。

礼儀正しさの遺伝子は残っている

2005年4月にマナーキッズテニスプロジェクトが始動する。新しいプロジェクトを展開する際に大切なのが「コアとなるポリシー」。以下に引用するのは、プロジェクトの

ターゲットにあたり田中さんが書いていた挨拶文。このポリシーに多くの人が共感した。「子どもも、若者の状況がおかしい。多くの方がそう感じるようになっていづいぶん時間がたちます。人間としての基本的なマナーやルールに欠ける。私的空間と公的空間のけじめ感

覚を持ち合わせない。傷つくのが怖いから他人と深く交わるうしろな、学びを含めて何事にも意欲がわかない。その上、体力や運動能力の面でもひ弱になっている。このような状況の是正に向けて、スポーツ・文化活動に親しみながら、日本の伝統的な礼法を体験し、マナーやルールを守り、体・徳・知のバランスの取れた人材育成に寄与していきたいと考えています（一部省略あり）

田中さんは、日本人が大きく変わった転換点として、明治維新、第二次世界大戦の敗戦とともにバブル経済を挙げる、バブル崩壊後、明らかに日本人の意識が変わったと感じているのだ。



商店街などで使えるポイントカード（マナーキッズ＆マナーコミュニティ・ポイントカード）を発行。有効期限が切れた失効ポイントはマナーキッズプロジェクトに還元される



テニスから始まったプロジェクトは、バスケットやサッカー、ラグビーなど、他競技にも広がりを見せており、テニス以外ですでに11,000人が参加した



2008年に亡くなった宮城黎子さんもこのプロジェクトへの賛同者。宮城さんの寄付によって創設されたのがマナーキッズ・リマインドボール。ボール型のキーホルダーを購入することで、宮城さんの意思を受け継ぐ



テニス、運動能力、マナー、感想文の総合成績で選んだ子どもたちをマナーキッズ大使としてウインブルドン開催中のロンドンへ派遣。今までの参加者の中には、フェンシングでジュニアオリンピック出場、東京都知事賞文武両道賞、全国カルタ大会準優勝者など、面白い人材が育っている

「結局、このままじゃいけない、と思っている人がたくさんいたわけです。『テニスの普及をやりますから協力してください』、じゃ無理ですが、訪問先にも挨拶できない従業員がいるわけですから（笑）、テニスに関係ない企業も協賛してくれました。

私だけでなく「何とかしなければいけない」という空気があつたらから、このプロジェクトが多の人の心にフィットしたんしょう」

田中さんは、日本人が大きく変わった転換点として、明治維新、第二次世界大戦の敗戦とともにバブル経済を挙げる、バブル崩壊後、明らかに日本人の意識が変わったと感じているのだ。

「地へたに座つてのもの良い。電車の中で化粧。最初は『変だ』と思つたことが、今では普通の状況になつてきています。それに学校に行つてみると、整列ができない。気をつけができない。ずつと立つていられない。子どもたちの姿勢は恐ろしいくらい悪くなつています。私はもう今がラストチャンスだと思つています。テニスを通して子どもたちを変えられることがこのプロジェクトの目的です。それに実際テニスを通して子どもたちと触れあつて、子どもたちの中に礼儀正しさの遺伝子が残っているのがわかるんです。それを呼び起こしてあげたいんです」

広がる マナーキッズテニスの輪

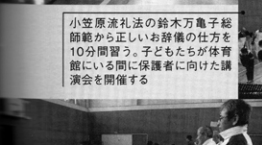
マナーキッズテニスで特に重視されているのが挨拶の部分だ。普段見かける民間のキッズテニスならば「あラケットを持って、ボールを打つてみよう！」ということがあるが、ここではまず自己紹介があり、次いでお辞儀の練習。そして何をやるにしろ「よろしくお願ひします」、「ありがとうございましたの繰り返し」。子どもたちが使っている言葉を借りれば「めんどうさい」、「だるい」とはかない。ただ、「ここが一番肝心なところなのだ。」

田中さんは本プロジェクトをスタートするにあたり、小笠原流礼法館木方亀子総師範の協力をりつけた。

マナーキッズテニス教室



開校式では、姿勢を正して、相手の目を見て元気良く自己紹介する。ここから子どもたちにとっては異空間だ



小笠原流礼法の鈴木木方亀子総師範から正しいお辞儀の仕方を10分間習う。子どもたちが体育館にいる間に保護者に向けた講演会を開催する



レッスンはミニテニスで行なう。新しい練習に入る時は必ず「よろしくお願ひします」「ありがとうございます」の挨拶を繰り返す



練習が終わったら全員で後かたづけ。これもみんなでやると楽しい



教室の最後には指導者と子どもたちが握手。指導者の目を見て心から「ありがとうございます」と言う

マナーキッズに関する情報は下記へ
<http://www.mannerkids.or.jp/>
 写真提供＝フォトキシモト

「日本で凄いな国ですね。礼儀作法だけで流儀があるのだから……」これは、田中さんが外国人から投げかけられた言葉。花、お茶に受け、日本には何百年と綿々と受け継がれる流儀がある。日本に限らず世界中でマナーは低下している。しかし日本は、元来礼儀正しさを尊ぶ国。せっかく素晴らしい素地があるんだから、これを捨て去るのはもったいない。それがマナーキッズプロジェクトで率先して行なう挨拶につながっている。

実際、プロジェクトは現場の先生たちからも高い評価を受けている。なぜなら子どもたちが興味を持って「だるい」ことに取り組んでいるからだ。

「道徳の授業で一思いやりとは……」と説いても子どもには伝わらない。そこには実践がないからです。それよりも「こうしない」と言われるほうが実践を伴う。私は低学年の時には、有無を言わせてやらせても必要だと思っています。子どもを叱らなければ、教えれば、できるんです。それは結局やらんと教えないからです。もちろん無理矢理挨拶させられるのは気持ち良くないでしょう。しかし挨拶とテニスをワンセットにする、子どもにとって一種のイベントになるので、嫌なことは感じないんです」

(2) マナーキッズプロジェクトの最大の強みは、文部科学省が後援してくれている点。後ろ盾があるから幼稚園や小学校の授業の中

に入っているのだ。講習を受けた学校にはラケット20本、ボール40個、ネット2組を寄贈する。プロジェクトで行なう講習は基本的に1校1回。あとは先生たちがフォローしてもらう。05年のスタートからこれまでマナーキッズプロジェクトには触れた子どもは3万人強。田中さんはこの「最初の一歩」が普及につながることを確信している。「データを取ったところ、テニスをやっている子のほとんどは親がきっかけです。逆に言えば、親がテニスと無縁だと子どもはテニスに行かないということでも。しかし、マナーキッズテニスを体験して「テニスって面白い」と感じた子どもの中には「いつかまたやりたい」と思いうる子もいます。彼らが将来的にテニス部予備軍。このプロジェクトは確実に普及につながるはずですよ」

品川区との コラボレーション

認定NPO法人の資格を得たマナーキッズプロジェクトは、本年度から日本テニス協会が主催するマナーキッズテニスを含むことになりさらに積極的な活動をスタートすることになった。その第一歩が品川区教育委員会とのコラボレーションだ。「我々のプロジェクトに興味を示してくれた品川区と協働してマナーキッズテニスを開催することになりました。」教育の品川をキヤッチアップして、その品川区は本気で。教育委員会が予算組みをして、授業の中でマナーキッズテニスを行なうこととしたのです。本年度は17校、3100人を対象に実施します。今までは、全国各地の100の小学校・幼稚園の授業などで開催する一点の展開でしたが、品川区では「面」での展開になりました。品川区で成功例を作り、品川区教育委員会と協働して全国に発信したいと考えています」

ボランティアな活動が大きくなると、それに伴う問題も出てくる。予算や、指導者の確保も課題だ。特に生徒5人に1人指導者を義務づけているマナーキッズテニスでは、生徒が100人いれば20人のボランティアスタッフが必要となる。しかし、目の前にいる田中さんは「いや、これが大変ですよ」と言いながらニコニコ顔だ。「幼稚園園児、小学校児童の合計数は88万人。これまでにマナーキッズに触れたのは、約4万1000人。微々たる拡げることができれば、もっともっと多くの子どもたちがテニスに触れることとなります。それが楽しい。やっスタートラインに立った気持ちです」

プロジェクトの理事長として、外部との折衝から、予算の算段、パブリシティ活動、さらにコートでの指導まで、すべての時間を支援してくる仲間と共にこのライフワークに捧げている田中さん。「これを始める前まではベテラン大会にも出ていたんですが、それがはやめ。人には頼んでおいて自分が遊ばなければいけないですからね。ただ教室を終えた子どもたちと握手を交わしてみんなから「ありがとうございまして」と言われるのは、そりゃ、うれしいもんですよ」。

親が理解してこそマナー

マナーキッズ教室では、正しいお辞儀の仕方、あいさつの仕方について指導していますが、子どもだけでなく、必ず保護者、コーチにも参加していただきます。また、別室にて保護者に向けた家庭内のしつけに関する講話もあります。その理由としては、子どもは「親の姿を見て育つ」からです。

少子化の問題の影響で、子ども一人にかけるお金は増えても、親は忙しく仕事をしていたり、親が「友達のような親子」を望むせいもあり、子どもの中に「一番学ばなくてはいけない」秩序であるとか「上下関係」というものを学んでいないことが多いのです。もちろん、先生やコーチにも同じことが言えます。

小さい時に、それらが必要とする場面は多くないかもしれませんが。しかし、大きくなったら必要になることです。この心の教育ができていないことにより、大人の社会に入ってしまったら、会社勤めをした際に、ストレスをため込んだり、我慢ができない、健全なコミュニケーションが行えない人間になってしまうのではないのでしょうか。また、お母さんが、洗面所ではなく、色々なところで化粧をし

3 あいさつをしよう!

Elements

あいさつというのは、人間が生活する上で基本となることであり、最も大切なこと。ここでは、認定NPO法人マナーキッズ®プロジェクトの協力を得て、同プログラムにて実施している小笠原流のあいさつについて学ぶ。

協力=認定NPO法人マナーキッズ。プロジェクト
指導=小笠原流礼法常任理事 本部教授 鈴木万亀子総師範

あいさつのしかた

正しくおじぎをしましょう



- ①上半身が真っすくの状態では腰を折る
- ②身体の横にある手が腿の前でハの字になるくらいまで身体を倒す
- ③「よろしくおねがいます」「ありがとうございます」と言ってから身体を倒す
- ④身体を起したら落ち着いて相手の目を見る

よろしくおねがいます



正しく立ちましょ

- ①足を揃えて立つ
- ②腰骨を立てて背筋を伸ばす
- ③おへそのまわりを固くして胸を開く
- ④アゴを引いて、真っすく立つ
- ⑤手は親指から小指をくっつけて自然と身体の横へ

てしまうなら、自然と子どももそうなります。お父さんが目を見て挨拶しないなら、子どももそうなります。先生がおかしなフアッションで学校に来ていたら、子どももそうなるんです。自分のお子様が我慢ができない、TPOをわきまえない子どもに育ってほしくないのであれば、幼稚園、小学生の頃にしっかりと愛情を持って導いてあげることが大切なのです。

朝のおはようは誰が言う？

朝、子どもが起きてきた時に誰が最初に「おはよう」と言っていますか？ 多くのご家庭がお母様ではないでしょうか？ 子どもが幼稚園のうちまでは、「あいさつは大切なこと」として、お母様から先に言って習慣づかせるのが良いでしょう。

しかし小学校に上がってから、子どもに先に言わせましょう。あいさつは目下から目上にするものですから、子どもから「おはようございます」と言わせるのです。もちろんお母様は家事の手を止めて笑顔と言葉で返してあげてください。父親、学校の先生、テニスのコーチにおいても同様です。

また、朝、子どもが学校に行く時には、お母様は子どもの背中を見守りましょう。子どもは

母の愛を感じ、安心感、自信が得られます。これにより、ストレスがたまりにくくなるので、人にいじわるをしない、途中であきらめない意識が育つのです。マナーというのは、約束を守ることです。すべてはそこから始まります。約束したことは最後までやること、自分がされて嫌だと思ふことは人にはほしくないこと、お話をする時には相手のお顔を見ることが、そういう基本的なことから、始めることが必要なのです。

認定NPO法人マナーキッズ® プロジェクトとは？

スポーツや文化活動を通じ《体・徳・知》のバランスのよい子どもを育てることを指針とし、小学校体育・道徳の授業の支援事業や、各地で色々なスポーツと組み合わせたマナーキッズ教室の開催、啓蒙を行なっている。

今回はマナーキッズプロジェクトにおける指導の一つであるマナーとあいさつの仕方について掲載する。

鈴木先生が教えるあいさつのポイント

POINT 1

おじぎは頭を下げるのではありません。「心を下げる」のです

POINT 2

あいさつをするときには「元気な明るい声」でしましょう。自分も元気になり、相手の方にも元気を与えることができます

POINT 3

怖い顔をしていては、正しい判断ができません。お顔は「やさしい笑顔」で

POINT 4

身体を起こした際にやさしい笑顔で相手の目を見ることを、心を残すと書いて「残心」と言います

POINT 5

あいさつは心と心をつなぐリボンです

